

萬葉に於て日本的感情を見る (八)

東京女子高等師範學校教授 石 井 庄 司

六、言葉と言繼

千萬の軍なりとも言舉せずさりて來ぬべき男も念ふ

卷六にある高橋連蟲磨の歌であります。天平四年八月に

藤原宇合卿(鎌足の孫)が、西海道節度使さいふ重い役目を帯びて任地に赴くさき贈つた歌の一つであります。長歌があつて、その反歌であります。一首の意味は、たさひ千萬の多數の軍勢であつても、彼此はせずさりに討ち取つて來るここの出來る頼もしい男子さ思ひますさいふやうな、所謂壯行會の心持で詠んだものであります。この歌の中にある「言舉せず」さいふのは、今申した通りの意味であります。また「さいふ」は言葉に出して言ふさいふのが「言舉」の本義であります。

卷十三にある柿本朝臣人麿歌集の歌さいふのによります

さ、「葦原の水穂の國は、神ながら言舉せぬ國」さあります。

日本の國は神代以來言舉をしない國であるさいふのであります。また同じ卷十三に「あきつしま倭の國は、神がら言

舉せぬ國」さ歌つてあります。しかし今は言舉をするさいふのが卷十三の歌の中に見えます。人麿歌集の歌には「數島の倭の國は言靈のたすくる國ぞまさきありこそ」さありまして、我が日本は言靈のたすけのある國さいふのであります。

言靈のたすけのある國であるが、しかし言舉をしないさいふのが大事なところさ思ひます。

古事記の中卷の日本武尊の御東征のこを記したところに、尊が歸路に伊吹山に御出でになつたこがであります。

尊は「この山の神は素手でさくに討ち取らう」さ仰つて、伊吹山にお入りになつたところ、麓で白い猪にお出逢になります。その猪の大きさは牛のやうであつたさいふこであります。その時、尊は言舉して仰せられるには「この白い猪は、伊吹山の神の使者であらう。かういふものは、今討ち取らなくても、歸りに取らう」さして、さん／＼登つていらつしやいました。ところがこれがよくなかつたのです。古

事記では註の形にして、「この白い猪になつてゐたものは、神の使ではなく、神御自身であつたのである。それが言擧をなさつたために、惑はされなすつたのである」と記してあります。「言擧」といふことは、日本書紀では「興言」とか「揚言」とか書いてありますが、大體この文字面の示すやうな意味であります。

さてわが日本の國は、神代以來、言擧をしない國であると思はれてゐるのであります。それはわが國風の尊い傳統であります。それが萬葉集の歌によつて十分うかがへるのであります。

ところが此處に、ちよつと見るに不思議に思ふやうなことがあります。一方では言擧をしないといふのが國風の純粹なものとしておきながら、また一方では「語り繼ぎ言ひ繼ぎ」といふことを重んずるのであります。勿論「言擧をしない國」であるが、言擧のさきは外國であるといへば、當然の事とも考へられませう。

山上憶良が病氣で臥牀のとき、藤原朝臣八束といふ人が河邊朝臣東人をして病狀を見舞はしめましたとき、憶良が涙を拭つて悲しみ嘆いて吟じたといふ歌があります。

士やも空しかるべき萬代に語り繼ぐべき名は立てずして
 「萬代の後までも語り傳へられるに足る功名も立てず、空しく此の世を終るべきであらうか」といふのであります。

また笠朝臣金村が鹽津山を越えるとき詠んだ歌が二首あります。

大夫の弓末振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐかね
 鹽津山打ち越え行けば我が乗れる馬ぞつまづく家戀ふら
 しも

自分の武勳をいつまでも後世に語り繼いで欲しいといふのは、まことに武將たる人の面目のあらはれとして當然と思はれます。卷三の富士山を詠んだ歌の終にも「語りつぎ言ひ繼ぎ行かむ富士の高嶺は」になつて居ります。

松浦佐用姫の領巾を振つたといふことを詠んだ歌にも「萬代に語り繼げしこの嶽に領巾振りけらし松浦佐用姫」といふのがあります。これは後の人が佐用姫の心中を推察してのものであります。笠金村の歌も相通するものを感じるのであります。

「永き世の語に」つゝといふやうな言葉がありまして、しつかりとお墓を造つて、「遠き代に語り繼がむ」といふ願つた歌もあります。(卷九、菟原處女の傳説歌)

更に轉じましては、ほごさぎすの聲を慕つて、さうか鳴いてほしいといふので

ほごさぎす今し來鳴かば萬代に語りつぐべくおもほゆる
 かも

といふ歌も傳へられてゐます。「萬代に語りつぐぞ」といふ

ここは、大きな名譽になつたことを思はせるのであります。

なほかういふ例があります。田邊史福麿たなべのふゆたけは左大臣橘家の使者として越中國に出かけました。この時の越中の國の守は大伴家持でありましたが、家持は福麿を國の守の館に招いて饗應し、歌を詠み合つて居ります。その中に、福麿は噂にだけ聞いてゐて、まだ見たことのない布勢の浦のよい景色を見ないでは何年たつても都へは歸るまいなごいふ歌を詠み、またかう申してゐます。

布勢ふせの浦を行きてし見てばももしきの大宮人に語り繼ぎてむ

布勢の浦のよい景色を行つて見たならば、奈良の京へ歸つてからは、宮中の方に「語り繼ぎてむ」といふのであります。この「て」は「つ」の未然形で、「む」といふ未來の「こ」の意味を強めてゐるのできつと語り繼いでやりませう」といふ程の意味になります。この場合の「語り繼ぎてむ」といふ言葉のひびきは随分強いものであります。そして、「語り繼ぐ」といふことが如何なる意義を持つてゐるかといふこともわかるのであります。

以上色々「語り繼ぐ」の用例を列挙してきましたが、次に申すのが一番この言葉の中心的なものかと思はれます。

さきほき山上憶良が病中に吟じたといふ歌を擧げましたが、後になつて、大伴家持がそれを慕つて、長歌を作つて

居ります。

勇士の名を振ふを慕ふ歌一首竝に短歌

ちちの實の父の尊、ははそばの母の尊、おほろかに心つくして、思ふらむその子なれやも、大夫や空しくあるべき、あづさ弓未振り起し、投矢なげや持ちち千尋射渡し、劍太刀腰に三り佩はき、あしひきの八峯踏み越え、さしまくる心さやらず、彼の代の語りつぐべく、名を立つべしも

反歌

大夫は名を立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語り繼ぐかね

長歌の大體の心持は、「父上や母上が、いゝ加減な心をつくし方で思つてゐて下さるやうなそんな子供ではあらうや、ある筈はない。男子おとこも生まれた以上何の爲すこともなく空しく暮らして居るべきであらうか、決してさうではない。あづさ弓を振り起し、投矢なげやを持ち遠いところまで射渡し、劍や太刀をしっかりと腰に帯びて、多くの山々を踏破し、任せられた仕事は滞りなく決行して、後の代永く語り繼ぐやうに名を擧げるべきである」といふやうな具合であります。

反歌では、この氣持を一層はつきり壓縮して詠んでありまして、「大夫たる以上は、名を立つべきである。後の代に聞き繼ぐ人も語り繼ぐであらうから」といふ意味であり

ます。名譽を重んずるこいふ武士道精神を端的に表現した作であると思ひます。

大伴家持にはまだ「族を嘯す歌」こいふのがありまして、大伴家の祖先以來の勳功を數々掲げてゐるのであります。餘り長いので原歌の掲載は止して、こゝで大體の意味を申し上げませう。

はじめは天孫降臨のころから説き起してありまして、天の岩戸を開いて、日向の高千穂の嶽に天降り遊ばされた皇祖瓊々杵尊の御代からはぐ弓を手に握りしめ、まかで矢を手挟み持ち、大久米部のますらを達を先登にして、鞘を背負ひ、山や河の岩を踏み破り通り、國を求めつゝ荒々しい神を討ち平らげ、服従しない者をやはらげ、掃き清めお仕へ申し上げて、わが大和の國の橿原の畝傍の宮に、御殿を立派に御造營になり、天下を御統治遊ばされた。その皇祖の御世繼ぎして續いて来る天皇の御代々々、隠すころのない明き心を以て、皇室に極めつくしてお仕へ申して来る所の、祖先以來の職務であるこ、特に言擧げしてお授け下さつた任務であるから、子孫の末々までも、見る人は語り繼ぎ、聞く人は手本にすべきであります。惜しむべき清きその名であるぞ。おろそかに祖先の名を斷絶させるな、大伴氏名に負つてゐる男子の方々の意味もあります。反歌は二首あります。

數島の日本の國に明らけき名に負ふ伴の緒心へこめよ
劍太刀つよく研ぐべしいにしへゆさやけく負いて來にし
その名ぞ

こあります。「見る人の語り繼ぎて、聞く人の鑑にせむを」こ云つて居ります。

人麿の歌にあらはれてゐるころは「言擧せぬ國」こいふ國柄が、一方では家持の歌なきによつて、語り繼ぎ言ひ繼ぐこを重大なここしてゐるのであります。この矛盾のやうな中に一入深い意味がこめられてゐるものと思はれます。こゝに我が國の精神が出てゐるのであります。ここばに就いての深い反省が見られます。言ふ必要のない時には言はない。しかし一度言へば必ず人を救ひ世を益すこいふものでなければならぬこいふこにもなりません。さういふこが既に萬葉の時代に考へられてゐたさ思はれるのであります。